

5月のことば

教育 ～学び⑤ 「ごっこ遊び」

新緑の季節。新しいクラスや職場の部署にも慣れて来る頃。この節、私の脳裏には「素直になって十回真似ると似非天狗^{えせてんぐ}を上回る。」という言葉が浮かびます。

これは、異動・転勤で新しい仕事が回ってきても真剣に十回真似てやってみると、中味もなく威張ってその部署に座している人を超えるという意味です。

「真似る」ことが「まねび」となり「まなぶ」につながります。そこで、真似る（学ぶ）為には何が必要か？

大人の場合は「素直な心になる。」ことであり、子どもの場合は、「その人その事への憧れ」と「ファンタジーの世界への没入。」です。

「ごっこ遊び」は憧れからファンタジーに入り、役割を演じることで自分を超えます。

又、役によって自分の衝動をコントロールする事を学び、更に物を想像上のものとして見る事ができる様になります。（例えば、おはじきを人、マッチ棒を自転車など）。

これにより、行動はもはや単なる知覚から観念によって成され、「観察」から「考える」ようになるのです。

ごっこ遊びが進み、「役割が行動で決まる」のではなく、「行動が役割で決まる」ようになると、ルールが分かり計画ができるようになり、高度な認識を持つに至ります。

そこで、大人が注意しなければならないこと三点。

1. ごっこ遊びは、子ども自身の観察と経験した範囲内のことでしか行なわれないので生活において、例えば愛情深い母親（役）を行なうこと、きちんとした仕事や整理整頓の美しさを見せること等、大人が普段の立居振舞を考えて行なわねばならない。
2. TV・ゲームを観てはごっこ遊びはできず、戦いごっこのみになる事を銘記する。戦いごっこに学びなし。
3. ごっこ遊びの最中に観念の入った物を無碍^{むげ}に扱う（例えば食事としていたビーズを物のように扱うなど）ことや、ごっこコーナーの上で大人同士が会話したり、横切ってファンタジーの世界をつぶさないように配慮する。

ごっこ遊びからの“学びの花”は、決して教え指示して開くのではなく、大人が意味を分かり、環境を整えて静かに見守ることから咲くのです。